



八戸セメント(左)と別雷神社(右)。所在地は新井田字下鷹待場。別雷神社の前身岩淵新山別当に鷹用の餌犬を供出させた盛岡藩時代の文書が残る。2019(令和元)年7月・筆者撮影

八戸市の「鷹匠小路」は、市内随一の飲み屋街である。東京にお住いの皆さんも、帰省の際は飲みに行くのではないだろうか。同じ南部領である盛岡市にも、八戸同様「鷹匠小路」という地名があったが、戦後の住居表示変更によりなくなってしまった。

さて、地名からすると、藩政時代はここに鷹匠たち

が住んでいたと思えるが、自分は最近少々疑問に感じるようになった。というのも、八戸藩の職員録にあたる「御役付座列」(1837(天保8年)には鷹匠なる役職がないのである。しかし、八戸と鷹狩りの歴史は深い。八戸藩は、1664(寛文4)年に盛岡藩から分かれて成立したが、それ以前の盛岡藩主たちはたがたび八戸周辺で鷹狩りを行っていた。例えば、2代藩主南部重直は1648(慶安元)年には2か月以上も八戸に滞在し、鴨・雁・キジ・白鳥などを捕獲している。主な鷹場は、馬淵川下流域にあたる長苗代や河原木周辺だった。新井田の八戸セメント周辺には「鷹待場」の地名も残っている。

鷹狩り用のタカを捕まえた場所だったのである。そもそも八戸の町は、分藩前の1627(寛永4)年以降に建設が始まったとされるが、場所の選定にあたっては、初代藩主利直が鷹狩りの途中に地理を熟覧して、この場所は将来必ず発展するとして自ら都市計画を行った、という伝承がある(『八戸藩史料』など)。

八戸の町は、鷹狩りととも

「鷹匠小路」に

鷹匠はいたか

中野渡 一耕

(元青森県史編さん 調査研究員)

に始まったのである。鷹匠小路の地名がいつ付けられたかは不明だが、盛岡藩時代からの可能性がある。

さて、それが八戸藩時代はどうなるか。藩の公式記録「目付所日記」で調べてみた。初代藩主の直房(南部重直の弟)は八太郎や新井田で鷹狩りを行っていて、鷹匠の存在も確認できる。しかし、直房は藩主在任わずか3年で急死、子の直

政は幼少で、成長してから幕府の側用人などの要職に就き、八戸にはほとんど帰らなかった。加えて、生類憐みの令で有名な徳川綱吉の治世で、綱吉が停止した鷹狩りを側近の直政がするはずがなかった。

興味深いことに跡を次いだ3代通信は、綱吉在世中の1705(宝永2)年に沼館で鷹狩りをしたことが確認できる。喜右衛門という鷹匠もいたが、1710(同7)年に病死、息子は幼少だったためか、鷹匠の職を継がず、これ以後、目付所日記から鷹匠の記録は姿を消してしま

まう。次に鷹狩りの記録が現れるのは、1745(延享2)年、5代信興の時代。鷹匠がいらないのにどうやって鷹狩りをするのか。実は、鷹匠も鷹も、本家筋にあたる盛岡藩から借りたのである。盛岡藩は、ハヤブサ・ハイタカ各1羽、鷹匠ら5名を7月から10月にかけて派遣した。信興は彼らとともに、是川や小田、白銀、

新井田に向き、自らアオサギやヒバリを捕まえている。このような盛岡藩からのレンタルによる鷹狩りはその後もみられる。鷹匠に代わり「御鷹扱御用」の役人が置かれたが、彼らは専門職の鷹匠と違い、一時的な役職だったようだ。

以上は江戸中期までで、その後どう変遷していくか調査中だが、八戸藩ではたまたしか鷹狩りが行われていない。幕府に毎年鷹献上の義務があった盛岡藩や弘前藩と違い、八戸藩はそのような義務はなく(雁やキジ、ツルは献上していた)、鷹匠を常置しておく必要はなかった。

加えて、藩主の嗜みとしての鷹狩りも、時代性や藩主の嗜好により、必ずしも行われなくなった。そのため18世紀前半には、鷹匠は八戸藩から居なくなつたのでは、というのが自分の結論である。「鷹匠小路」と言っても、小藩である八戸藩には、そもそも集住するほど多くの鷹匠はいなかったが、江戸中後期には名前だけの町名になってしまったのではないだろうか。